

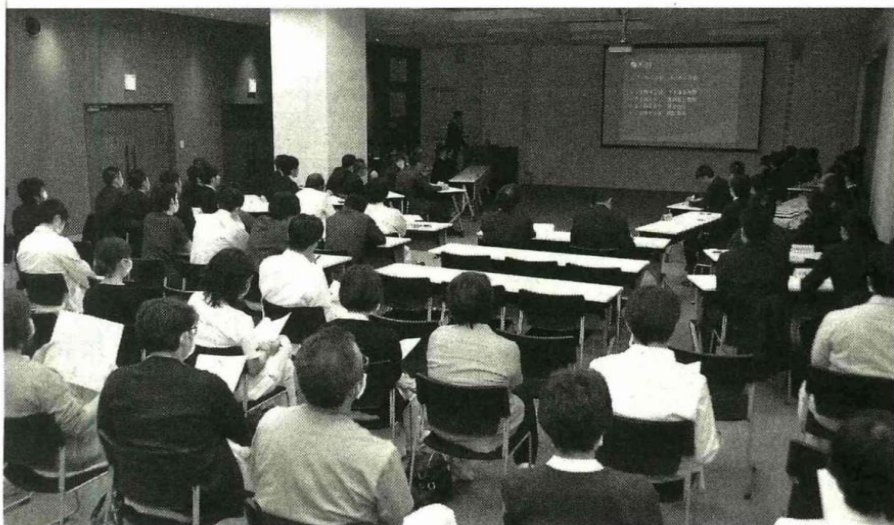
発作発生5分、30分重要

消防・救急隊員と製鉄記念室蘭病院

小児科中心に症例検討会

救急救命の最前線を支える胆振管内の消防・救急隊員と、製鉄記念室蘭

病院(前田征洋病院長)による「救急症例検討会」が、室蘭市知利別町の同



「小児科領域のけいれんやてんかん症例」を中心に意見を交わした救急症例検討会

病院で開かれ、「小児科領域のけいれんやてんかん症例」を中心に、昨年同病院に搬送された症例について意見交換。救急医療技術の向上を目指して情報を共有した。

16日夜に開かれた同検討会には、室蘭、登別、西胆振、白老各消防の救急隊員や、同病院の医師ら約80人が参加。斉藤淳人小児科長は、昨年の子児搬送受け入れ計106件の66%が「けいれん症候」で、このうち「66%が『熱性けいれん』、29%が『てんかん』だった」と解説した。

その上で、「(生命予後不良や神経系に後遺症を残す)重積発作の回避が最大の目的。(症状発生から)止まりづらくなる5分と、脳障害を起

しうる30分がタイムポイント)、」がたがたが止まるより、意識回復が大切」と強調した。

その後、登別市消防本部の戸田太一さんが小児のけいれん発作、室蘭市消防本部の高橋裕樹さんが小児のてんかん症例について説明。通報から現着前後、搬送までの状況などを報告し、医療スタッフらが適切な対応などについてアドバイスした。

このほか、白老町消防本部の小坂吉晃さんは「早期に閉塞性動脈疾患を見抜けなかった症例」、西胆振行政事務組合消防本部の石川裕巳さんは「ショックへの対応が遅れてしまった症例」について発表した。

前田病院長は、①胆振東部地震発生後の救急外来患者対応(昨年9月6〜9日、計277人)が西胆振医療圏の病院で最も多かった状況②心疾患の診断に不可欠な「12誘導心電図のデータ」を救急搬送中に取得し、モバイルを用いてデータを同病院に送る「12誘導心電図伝送システム」について、西胆振行政事務組合や白老町の各消防本部の救急車にも搭載する必要性などを解説した。

(松岡秀直)